



郷土摂津 いにしえ通信

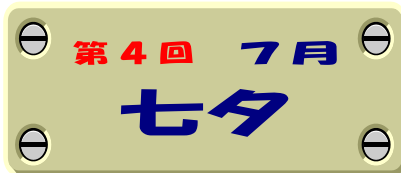
第39号 平成13年7月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習部生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.settsu.osaka.jp/>



わがまち ちょっと昔の生活

本来は陰暦7月7日でしたが、現在では新暦の7月7日が多く、8月7日に行う地方もあります。またこの日を盆初め、七月盆とか言って、盆行事の準備をする風習もありました。

七夕の由来は、中国の乞巧奠（きこうでん・乞巧は裁縫の上達を願うことで、牛・織女星が一年に一度逢えるという七月七日夜、裁縫の上達を願って行う祭り）の風俗が、わが国古来の棚機女（たなばたつめ・織女が水辺の機屋にこもり、機の傍で神の来臨を待ち、神の一夜妻となることによって、村からけがれを持去ってもらうという行事）の伝承と習合したもので、宮中でも始められるようになりました。七夕は、五色の短冊に歌や文字を書いて、色紙とともに竹に結びつけます。このような形式で七夕竹を立てるのは、古来の祓の意味が薄れてきた近世以降、都会で普及した方法で、地方によっては 藁やマコモで七夕馬を作って飾る習慣もありますが、これは盆の精霊迎えと結びついた風習と言えます。



↑江戸時代の七夕祭りの風景
「絵本小倉錦」より

最近の聞き取り調査から

七夕の行事は七日の夜、七夕送り・七夕流しといって、飾り竹を川や海に流すことで終るが、七夕を送ることは褌いを行なうということで、古来の七夕はこれが中心でした。摂津市域の味舌地区では数十年前までは、山田川に流していました。山田川は水量が少ないので、水が流れにくくなるという理由で、やめてしまいました。鳥飼地区でも、淀川に笹をながしていました。



講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。
また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

千里丘公民館講座

千里丘から古代の
メッセージが聞こえる

考古学入門講座が
開催されました。

第1回 6月9日(土)

**考古学とは何か？
～大地に埋もれた歴史～**

考古学のあゆみ、発掘調査はどう行い何をするのかなど、意外と身近で親しみやすい考古学について学習できる内容でした。

第2回 6月16日(土)

**吹田市内における
最近の発掘調査の成果**

吹田市博物館職員をお招きして、吹田市内の最近の発掘調査成果や、七尾・吉志部の瓦窯についてスライドをもとに説明を受けました。

第3回 6月23日(土)

**蜂前寺跡埋蔵文化財発掘調査の成果
～発掘調査で分かる中世のまちなみと暮らし～**

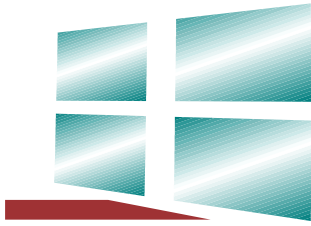
千里丘公民館の向かいで実施しました発掘調査では、千里丘の中世の営みの一部が分かりました。その成果について、担当者が説明しました。

◎3回とも千里丘公民館集会室で午後2時から4時まで開催されました。

蜂前寺跡埋蔵文化財発掘調査成果展



← 講座期間中は公民館ロビーで蜂前寺跡で出土した土器や写真を展示しました。



意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

味生(あじふ)の歴史

別府村

一津屋村・新在家村とともに三ヵ村で水防上囲堤を形成し、この三村を「三ヵ村」と総称していました。当地で神崎川が安威川と合流したため、堤防の損・決壊などにつねに悩まされていました。集落は両河川合流部の堤内にあり、富田村（現高槻市）方面への道が村内を東西方向に横断。古代の鯨生野、中世の味原牧の一部にあたるといわれています。

元和初年の撰津一国高御改帳には高槻藩内藤信正領の「別府 一屋新在家」1,943石余と、豊臣秀吉の御伽衆前庭半入領の「別符新在家」200石が見えます。寛永～正保期（1624～48）の撰津国高帳に「別府村」として853石余が記され、領主は京都所司代板倉重宗。重宗は寛永六年に当村の検地を行い、検地帳写（宮本家文書）が残っています。

明暦2年（1656）重宗の下総関宿藩転封により幕府領となり、寛文9年（1669）から旗本仙石久邦領となりました。仙石領は幕末まで続きました。宝暦10年（1760）には神崎川中付洲の二反分をめぐって対岸の西成郡北大道・南大道・西大道三ヵ村（現東淀川区）と、当村および味舌下村との間で境争論が起りましたが両者間で分割することで和解決しました。その後この二反について同12年にこの五ヵ村から開発願を幕府代官所に提出、明和9年（1772）には当村分三畝の地代銀と鋤下年季に関する請書を提出しています。

淀川過書船の一根拠地で、当村の過書船は道灘衆中船でした。また村には過書座支配の屎船株もあり、撰津・河内諸村と大坂三郷との下屎汲取りの特権をめぐる争論にも加わったようです。天保13年（1842）の琉球人江戸参府時には、淀川通船綱引人足を一津屋村とともに負担しています。明治9年（1876）頃には村内に50石未満の荷船が33艘あり、神崎川・淀川の水運に利用、神崎川分流口の下流には上川島渡があり、幅60間で渡船2艘は私船でした。国役堤は二ヵ所。一つは慶長15年（1610）に普請がなされた神崎川外島堤で、堤長591間のうち村領411間。もう一つは宝永元年（1704）に新国役となった廻堤で堤間648間です。外島堤については享保11年には神崎川下流の西成郡下新庄村などの国役普請願に対し、水行の妨げになるとして、鳥養郷、吹田村（現吹田市）、三ヶ牧郷（現高槻市）などとともに取払訴訟を起しています。用水は安威川に設置した水神樋から取水するか、上手の一津屋村・新在家村の余水をもらい受けました。悪水は神崎川へ直接排水するか、三ヵ村の共同の排水路である三ヵ村井路を利用したようです。当村に三ヵ村井路の安威川伏越樋があります。 「平凡社・大阪府の地名」より 担当（茗荷）

第4回

埋もれた
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになる摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介します。

平成9年度
蜂前寺跡
1次調査

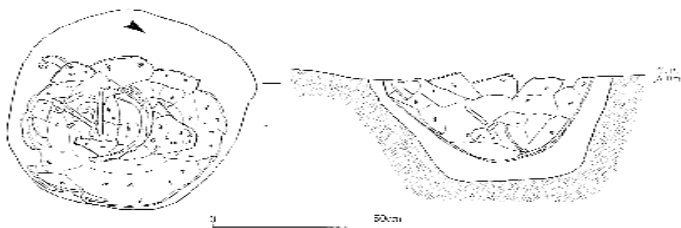
←須恵器埋甕遺構
調査区東半から赤褐色粘質土にくいこみ形で検出されました。上部は近現代の工事で削平されていました。

須恵器埋甕遺構

このときの発掘調査では、古墳時代後期の須恵器の大甕が横たえて埋納された状況で見つかりました。中には須恵器の短頸壺が置かれていました。また横たえた底の胴部には穿孔と言われる人為的な穴があげられていました。穿孔して据えられていたという点では、弥生時代の甕棺・供献土器などに見られます。日常で使用する土器との区別、魂を抜くためなどこの穿孔行為には諸説があります。また平安～鎌倉時代では、白磁・青磁碗の一部を打ち欠き盗難防止のため機能をなくした上で土坑墓に副葬していたようです。

須恵器埋甕遺構はあまり類例が知られていません。しかし泉北丘陵西部の美木多地区の発掘調査（美木多第1地点S X 11・13『陶邑VII・大阪府教育委員会』）や吹田市芝田町に所在する吹田操車場遺跡の発掘調査（No.40 トレンチ『吹田操車場遺跡・大阪府文化財調査研究センター・1999年3月』）の報告に見ることができます。前者では、須恵器製作工人の甕棺の可能性を指摘しています。また後者については『播磨国風土記』に「大甕を此の上に掘り埋めて国の境と為し」との記述が見られます。この記述から大甕を使った古代の土地の境界で行われた祭祀（祭り、儀式、宗教行事など）の可能性を指摘されています。

担当 （伊部）



← No.40トレンチ
埋甕出土状況
平面・断面図